

越後の冬

小川未明

青空文庫

小舎こやは山の上にあつた。幾年か雨風に打たれたので、壁板したみには穴が明き、窓は壊れて、赤い壁の地膚あはが露あらわれて、家根やねは灰色に板が朽ちて 処ところどころ々むしろに藁かぶを掩かぶせて、その上に石が載せられてあつた。この山の上は風が強い。雪解ゆきげの頃になれば南の風が当るし、冬は沖から吹く風が時々小舎を持つて行くように揺ゆるのであつた。だから家の周囲まわりには四方から杉や、松や、榛はんの材で支えをして置く。その木すらもはや大分根元が腐つて、少しの風でぐらつくのだ。

田はたけや圃とりのいれの収穫とりのいれは済んだ。太吉の父親は病身の妻とその子を残して、上州へ出稼でかせぎに出たのである。来年、この北国ほつこくの山や野が若々しい緑で被おおわれて、早咲の山桜の花が散つて、遠野に白い烟けむりが棚たなび曳ひて、桃の花が咲く時分にならなければ帰つて来ない。

太吉は炉ろばた辺たきつに坐つて、青竹を切つて笛を造りながら、杉の葉や枯れた小枝を手折たおつてはこれに火を焚たき付けて、湯を沸して町から母の帰るのを待つていた。長い月日の間、火を焚く烟で黒く煤すすけた天井の梁はりからは、煤が下つてゐる。其処そこから吊ひされた一筋ひとすじの鉄棒かなぼうには大きな黒い鉄瓶てつびんが懸かつていた。ぱつと移りの易いい杉葉に火が付いて、紅い炎は梁の煤にまで届ここうとして、同時に太吉の顔を赤く色彩いろどつた。太吉は髪かみの縮れた、眼の大きな兎こで

あつた。燃え上つた火に薪たきぎを入れて、火のこれに燃え付くのを見守っている。紅い炎の舌は、この黒い鉄瓶を嘗なめるように周囲にちらちらと纏まつわつて、つるつると細い鉄棒を辿つて、天井の梁にまで走ろうとしたけれど忽たちまち思い止とまったように穏やかに燃え収まつた。

太吉は全く火の燃え付いたのを見て、又傍かたわらの竹を取り上げて小刀で孔あなを明け初はじめた。白い細こまかな粉がばらばらと破れた膝の上に落ちる。暫しばらく太吉は熱心に気を笛の方に取られていたが、ふと手をやめて窓から外の空そらあ合を眺めた。ただ白く雲自身が凍っているように、昵じつとして空は鈍く、物憂ものうく、日の光りすらなかった。彼方あちらの方は一面に暗くなつて見える。暗くなつている空に浮き出ているように溪たにを隔てた松林の山は黒く見えて、僅わずかに見覚えがあるため、それが近くの山であるということが分るが、若もし、全く見覚えがなかったなら、あの山は十里も彼方にあると言われたとて、それを信ぜずにはいられないような、遠い気持がする。太吉の眺めていた眼は自おのずから塞ふさがった。言い知れぬ悲しさが胸に湧いたからである。

「もうお母かあは帰らしやる時分だ。どの辺へ来さつしやつたろう。」

と、独りで言いながら、考えて頭を傾かしげていたが、また何と思ひ返したか、笛を取上げた。笛を見ると、彼はまた楽しみの心を禁ぜずにはいられない。この笛を吹くのだ。麓ふもとの村

へ持て行つてこの笛を吹くのだ。雪が降つて外へ遊びに出られなくても、この笛があれば、吹いて楽しく家で遊んでいられる。来年の春になつて、小鳥が来る時分までもこの笛を大事にして取つて置く。

「何時頃お父さまは帰つて来さつしやるだろう。その時分までもこの笛を大事にして取つて置いて帰らしたら見せるのだ。」

こう考えると、無限にこの笛が懐かしい、恋しい、何うしたらいいだろうかと笛を取上げて彼は雀躍をした。而して割らないようにと念に念を入れて、只一つまだ開けない孔を穿り始めた。

「この孔が開いた時分にお母は帰つて来やしやるだろう。」
 といつて、口を歪めて、眼を円く飛び出して、小刀に力を入れた。

雪の多い上越後の片田舎では、冬になれば外の楽しみは全く絶えてしまう。獵に出かけるものはこれを商売にする獵師か、若しくは金持の道楽息子他にない。一般の百姓は若い者も、年老たものも、総て終日囲炉裏に火を焚いて取巻き寛ぎ、声の好いものは声自慢に松前や、または郷土固有の甚句や、磯節などを歌つて、其処に来合せたものに聞せる。皆なはつくねんとしてこれを聞いている。家の外には雪がちらちらと降つて、前の

小川の水は独り寂寞せきばくを破やぶつて囁ささやいて流ながれてゐる他、村の端はすれに廻まわつてゐる水車みずぐるまの音が静かな林や、田の中を通とほつて其処そこまで聞きえて来る。けれど家の中うちにゐるものの耳みみには、この小川の囁ささやきも水車の音ねも聞きえない。ただ、歌い手の歌の声こゑに聞きき惚ほれてゐるばかりだ。或者ある者は懐ふところ手の儘まま聞きいてゐる。或者ある者は頬ほお被かりをした儘まま聞きいてゐる。或者ある者は火かに手を翳かざしたまま、煙くすぶる煙けむに眼まなこを瞬しばたたいてゐる。さもなくば酒さけを温ぬめながらこれに合あ槌いづちを打うつて陽ひ気けにするばかりだ。実に北国の冬は、笛ふえを吹ふくか、歌うたを歌うるか、酒さけを飲のんで女をんなに悪から戯かか、而しかして其等それらの遊あそび方かたが原始げんじ的で、其処そこに言いひ知しれぬ哀あれがある。是等これらの笛ふえの音ねも、歌うたの声こゑも、寒ふい、澄すみみ渡わたつた空そら氣きに透とおつて、一層いっそう木精こだまに冴さえる思おもひがした。

ヒューと梢えだに当あたる風かぜの音ねがして、ガタガタと窓まどから吹ふき込こんで障せき子こに当あたつた。遽にわかに天あま氣きが狂くるつたのである。太吉たきちは外そとを眺ながめて崖がけ端つぱたに立たつてゐる一本いっぴんの榎えんの木きの頂いただきに目めを止とめていた。

秋あきの頃ころ、黄色きいろい粉こなを吐はいた花はなの乾ひか固かたまつた死骸しかいや、小こさく黒くろく見みえる実みや、それも僅わずかかに彼方こゝろの枝えだに二ふたつ、此方こゝろの枝えだに一ひとつある位ほどで他に一ひと片ひらの葉はの影かげも止とめていいなかつた。哀あれな裸姿はだかになつて木きは悄しよんぼり然ぜんと立たつてゐる。枝えだは四方しやうほうに咲さいてゐて、この細こい枝えだにも、冷ひやな、切きるような、風かぜが当あたるかと思おもうと痛いた々々しい。その細こい梢えだの頂いただきを見詰みめてゐると、急いそ

に太吉は母が恋しくなつた。

鉄瓶の湯は煮え沸ぎ^たつて、火は何時しか消えてしまった。太吉は笛と小刀とを下に置いて家の外に出て見た。

一度降つた雪は、まだ処々^{ところどころ}消えずに山や、田や、圃に残つていた。麓の村も見えた。村の端にある水車場の家根も見えた。その水車場の傍を通る往還も見えた。けれど一人の影すら見えなかつた。隣村でこの頃新築した小学校が白く林の間から見える。町へ行く時通る長い野中の松並木が微かになつて見える。

北の海の方を見ると、ただ白く波頭^{なみがしら}が躍つていた。空は暗く、悪魔が住むように思われた。林の頂に遮られ^{さへぎ}、山の鼻に隠れてその暗い空も、鉛色をした海も一部しか見えな^い。前には脈々たる頸城^{くびき}の山嶺^{さんれい}が迫つて、その高い山を越えれば他国である。何の山にも雪が来て頭が真白になつていた。雲が降りて山々の腰から上は墨を塗つたようだ。

太吉はまた暗い沖の方を見た。

「お母は何うさつしやつたろう。……いんまに降つて来るだに……。」

太吉の母は病身であつた。いつも青い顔をして咳ばかりしていた。けれど太吉を可愛^{たておや}がつた父親^{たておや}が旅稼^{たびかせぎ}に出でから、一入^{ひとしお}太吉も母を慕つた。母は二三日前まで床に臥^つい

ていたが、この日は朝のうちは天気がよかったので、買物をするため、豆を少し許負ばかりよつて町へ行つた。町へ行く時、

「太吉や、気分もいいし、お天気も好きそうだから町へ行つて来るぞ。昼過ひるすぎには直じきに帰かえつてくるから待まていれよ。」

と言いい遺なして、平常商売ふだんあきなに出る時の風で、草鞋わらじを穿はいて出て行つた。この村から、高田へは三里、直江津へは二里ある。母は常に高田へも行き、直江津へも行つた。太吉は、母に向つて何方どっちの町へ行くのかと聞こうかと思つたが、母が直に帰つて来るといつたので、別に聞かなくともいいと思ひ返した。而してただ、

「そんだら、早く行つて来やしやれ。雪が降つて来ると不可いけないすかい、早く行つて来やしやれ。」

といったばかりで、出て行く母を淋しそうに見送つていた。太吉は今年十四であつた。山にはただこの家一軒あるばかりだ。麓の村に下りる迄は二三丁程あつた。太吉は日に幾回となく、この赤地あかつちの山道を下りて遊びにも行き、家の用事をも達たしに行つた。その道は無論細い坂になつていて、杉の林を一つ通らなければならなかつた。天氣の好い時は何でもないが、風が吹いて、雨が降る時はこの下を通ると雫しずくが滴たれる、杉の枝がざわざわと動

いて、襟元の寒いのが感じた。又雪が降ると杉の枝が撓んで、頭にかかるのが厭な感じであった。

家の前に立っついていて、水車場の傍の往還に人の通りがあるかと眺め——若しや自分の母が、今にもあの道の上に出て来はせぬかと見ていたが、何時迄待ててもそれらしい姿が見えなかった。

「お母、早く帰つて来てくれやしやればいいに……。」

と太吉は独り呟いた。而して眼前に悲しい影がかかったように、自と気持が滅入るのを感じた。尚も太吉は立つて水車場の方を見ていると、裏の山から飛んで来た鳶が頭の上を過ぎたが、軽く、急しげに翼を刻んで、低く溪に舞い下つて水車場近くの枯木に止つた。止つたかと思うと、又急しげに翼を刻んで、再び高く舞い上つて、向うの松林のある山を越えて遠く、海の方へと飛んで行つた。太吉はその鳶の行衛を見守つていた。

この時寒い風が吹いて来た。

振り向いて、裏の山を見ると、山は夕暮の空に接吻していた。山と空の境界に松だか、杉だか聳えていた——二本——三本ばかり——その樹の頂が、北の寒い風に動いていた。

「ああ、もう晩方になつた。まだお母は帰つて来やしやらん……。」

太吉は坂を下つて、杉林の処まで来た。けれど母の姿は、まだ見えなかつた。暮れるに早い山の林——その下蔭が暗くなつた。山雀やまがらやら、四十雀しじゅうからやら、その他の小鳥が、チエンチエンツーツーと林の暗い、繁みで小啼ささなきをしていた。

「お母！」と呼んで見た。

けれど、その声は空しく木精こだまに響いたばかりだ。魂消たまげたものか。パタパタと鳥の羽叩はばたきたのが聞えた。

耳すまを澄すと、水車の音が此処こゝまで聞えて来る。ただ悲しいと思つてその音に耳を澄していると、

「お母——病気で——死にそうになつて——道で臥たおれていやしゃ——る。」

と歌っているような。その歌っているのが、誰かが歌っているような。その誰かが自分であつて、自分の心が歌っているような。そうかと思うとやはり水車が歌っているような。

——太吉は、母が病気で道で臥たおれているのでないかと思つた。

そう思うと胸の裡うちが騒さわぎ出した。もう一刻もこうやつていられなくなつた。彼は仕度をしようとして走つて家へ歸つた。家へ入ると急に中が真暗まつくらになつたようで、窓から明りが差し込んでゐるばかり。それも悲しい晩方の空の色に、何となく一家の不ふし幸あわせを語つてい

るようだ。囲炉裏の火は全く消えて、鉄瓶の湯も水に返つたらしい。僅かに差し込む窓の明りが、其処に投げ出されていた笛と小刀とを照らして、小刀の刃が白く光って見えた。

太吉は笛を見ると、急に昼前、まだあの笛の孔を明けぬ前は母がいたのだと思つた。母が今帰つてくれれば、この笛は昔の孔の明かぬ前になつたからとて惜しくない。斯様こんな笛はいらぬから、どうか母が帰つてくればいいにと地踏じだんだ踏んだ。

太吉は小さな草鞋を穿いた。菅笠すががさを取つて戸を閉めると一目散に駆け出した。

「町へお母を迎いに行つて来る——。」

こう独り言をいうと、急に胸が塞ふさがつて、熱い涙がぱらぱらと湧いた。太吉は心のうちでこう叫んだ。

「お母に遇あつたら、ウンと恨んでやろう！ お母に遇つたらウンと泣いて小言こごとをいつてやろう！」

夢中になつて一目散に峠を走つて、村に下りると、急に他の人の顔が目付いた。

けれど胸が張り切つて、知つた人に遇つても物を言うのが厭であつた。

成丈なるたけ人の顔を見ないようにと走つて、いつしか水車場の脇も通り越した時分、

高田へ行かしたか？ 直江津へ行かしたか？……と感つた。

太吉の歩みは遅くなった。

「直江津へ行かしたんだろう？ どれ、聞いて見よう……。」

村端に一軒の桶屋があつた。よく母が町への出入りにこの家へ立寄るのである。いつしかその桶屋の前へ来た。五つ許の頭に腫物の出来た子が立っていた。家の前に一本の柳の木があつて、子供の汚物を洗ったのが、その柳の木から壁板に繋がれた縄に掛けてあつた。家は藁屋で、店には割りかけた赤味の板が散ばっていた。けれど別に人の来ている様子はなかつた。

太吉は外で、こう声をかけた。

「今日は！」

「おーい。」 「太吉かー。」

「お母今日寄らしたかい。」

「いんや、寄らしやらんぞ。町へ行かしたけい。」

「まだ帰えらしやらんから迎いに行くだ。」

「まだ帰えらしやらんちゆうだか。」

「何方へ行かしただらうのう。」

「己^{おら}あ知らんが直江津だんべえのう。」
と桶屋の女^{かみさん}房が家の内で答えた。

太吉は直江津へ向つた。

厚く重なり合つた雲の断目^{きれめ}から、飴色の弱い日が洩れた。畦^{あぜ}の並木の片側が薄く照り映えた。田の中には氷が張つて、処々に雪が消えずに残っている。街道を行くと、旅人の影がちらちら見られた。電信柱は遠くまでつづいた。折^{おり}々冬木立に風が当つて、枝が鳴るかと思ふと頭の上の電線が呻つた。彼方に沙^{すな}山^{やま}が見える。急いで来ると、やがて沙山へ着いた。沙山を越えると町だ。

町へ入つたのは日暮方であつた。入日が海辺の町に当つていた。空つ風が強くて、黄色な砂^{すなほこり}塵^{あが}が揚つていた。雪が来る前には乾くものだ。道は乾き切つて割れている処さえあつた。小高い丘の船問屋の高い竿の尖^{さき}に赤い旗が翻^{ひら}々^{ひら}と閃^{ひら}めいている。また町の三階造の宿屋の窓硝子^{まじガラス}がぎらぎらと黄金色に輝いていた。太吉は町の中を彷徨^{うろうつ}していた。馬が荷車を引いて通つた。人力が駆けて行つた。何れも日暮方であるのと、夜になると風が寒い^{さいふ}のに怖れて、行先を急いでいる。その他、忙^{せわ}しそうに道を歩いている男や女の姿を見た。けれど自分の母の姿は見えなかつた。

太吉は、心当りの家を尋ね廻つたが、何等の手掛りを得なかつた。彼は疲れた足を引摺つて町を出ると、浜辺の広々とした処に來た。この辺は一面に無縁の難船者の墓がある所であつた。何処の者とも分らない航海者や、船乗人が、暴風で船を壊されて、海の藻屑となつて、この浜辺に打ち上げられたものを、この海岸の漁獵人が此処に葬つたのである。昔からの墓が此処にあるのだ。いずれも三尺に満たぬ木標が建られていた。古いのは腐つてしまい、二三年前のものは、墨痕が雨風に消えて、根元が腐りかけて傾がつている。まだ新しいものは字も鮮かに読まれて、「遭難者の墓」と、別に名の分ろう筈がなければ、ただこう書いてあつた。他に、卒塔婆や青笹などが処々に建てられていて、その赤く枯れた笹に当時結び付けられた白紙や、赤い紙などが淋しげに風に動いていた。太吉はその墓場で休んだ。

白い徳利の欠けや、石地蔵の頭なども落ちてゐる。暫らく、石の上に腰を下していた。此処からよく海が見える。海は真黒だ。空は暗い。空の暗いのよりも海の色が黒い。彼は偶然この黒い海の中に怖ろしい鱧や、鱻鮫が棲んでゐるのだと思つた。

「お母——どうさしたろう。」

こう力なく言つて、太吉はまた当もなくなるとぼとぼと歩き出した。

直江津と高田との間は二里余りある。直江津は北に、高田は南になっている。

日が全く暮れてしまった。太吉は疲れた足を引摺りながら、とぼとぼと昔の今町街道

(直江津から高田へ行く道)を歩いて来た。北風が強いので、雲が払い去られて星が出た。空は海のように青かった。星の光りは凍るように冴えた。宛然さながら金銀、水晶、瑪瑙めのうを砕いた

たようであった。太吉は踏切番の小舎こやの前まで来ると、この汽車道に添ついて行けば早く高

田へ着くと考えた。小舎は野中であつた。四辺あたりの林や、森は静かに眠っていた。小舎の障

子には明るく火影ほかげが照つて、中で二三人酒を飲んで笑っている様子であつた。太吉は番人

の見ていないのを幸いに抜ぬき足あしして線路内に立入ると一生懸命に線路に付いて駆け出した。

一 陣ひとしきり夜嵐が空を渡つた。星は身み慄ふるした。

轟々ごうごうと闇の裡に鳴つて溪河が流れている。其処には、黒い鉄橋が架かつている。太吉は

氷のように冷たな鉄橋に縋すがりながら細い板の上を怖る怖る渡つた。下は暗く、深く深く、

岩に砕けて水が叫んでいた。霜は一面に白く、粉の如く板の上に結んでいた。星明りに白

くなつて光つた。やつとその難関を通り抜けた。遠くの方で犬の遠吠するのが聞える。

また一陣夜嵐が空を渡つた。

太吉は覚えみず身戦まいとすると、北の方から黒雲が自分の後を追つて来た。瞬またたく間に拭ぬぐつ

たように星晴ほしはれのしていた空は曇つて、星の光りが遠く遠く幽かすんだ。

また一陣夜嵐が空を渡つた。さらさらと顔に当たつたものがある。撫なでて見ると雪であつた。あ、雪が降つて来た！ といつて太吉は途みちを急いだ。この辺には人家がなかつた。全くの広い野原の中で、目を遮る大きな林もなかつた。雪は次第に降つて来た。

今迄頼りに歩いて来た二ふた三条の線路は見えなくなつた。枕木も隠れてしまつた。太吉の笠や着物は重くなるまで雪が積つた。益ます々夜嵐は吹き募つて、雪は目となく耳となく、襟元となく入り込んだ。指頭ゆびさきも、足尖つまさきも、感じがなくなつた。何処も一様に真白になつて、もう一歩ひとあしも踏み出すことが出来ぬまでに四辺が分らなくなつた。

「お母！」と太吉は泣声を上げた。

その声は余りに小さかつた。弱かつた。彼方の畦あぜに悄しよんぼり然と立つてる並木にすら、聞えなかつたであろう。漸だんだん々黒雲は頭の上を通り越した。薄明るかつた南の方の空が、暗くなつた。黒雲が空を掩い尽したのである。ただ闇の裡に風が暴あれた。雪がさらさらと鳴つた。耳に鳴る雪は刻々に地に積る気はいがした。

眠じつと立たつていると手足がしびれて来てだんだん気が遠くなつた。遂に何処どこに何どうしているのやら分らなくなつた。——種いろん々なものが見えた。種々な音が聞え始めた。昼前に造こつた笛

が、あの儘転がっている、水車が歌をうたっている——その歌は水車でなくて、自分が歌っているようにも思われる。桶屋の前に子供が遊んでいた。あの黒い海に鰐が住んでいる。白い徳利の欠が落ちている。笹に白い紙、赤い紙がひらひらと動いている——。

ビューウ、ビューウ……風の音！ つづいて凄じい車の轟きがした！

ほのぼのと夜が明け離れてから四時間ばかり経た。鳥は畦の並木に止まって悲しそうな声で鳴いている。ちようど雪の晴間であつた。四辺はどんよりと曇つて、今にでもまた降つて来そうな空模様である。

線路の上に五六人、集つて何やら見ていた。見ているのではない。取片附ていた。雪が血に染つて子供の死体は滅茶苦茶であつた。集つているうちに一人、頭から黒い布を被つて、顔色が蠟のように青白い、寡れた女がある。眼は泣き腫らして、唇の皮が厚く乾らびて、堅く死骸に抱き付いたまま身動きすらしなかつた。

それは太吉の母であつた。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 小川未明集 幽霊船」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年8月10日第1刷発行

2010（平成22）年5月25日第2刷発行

底本の親本：「定本 小川未明小説全集1 小説集※〔#ローマ数字1、1-13-21〕」講談社

1979（昭和54）年4月6日第1刷発行

初出：「新小説」

1910（明治43）年1月号

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2016年11月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

越後の冬

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>